



言いさしの文の家

認知の小休止

どの家族にも秘密がある。

そのほとんどは、決して口にされない。

間のなかに生きている。

誰も二度と触れない話題のなかに隠れている。

紹介されることもないまま、食卓の椅子を占めている。

私は、言いさしの文が形づくった家で育った。

誰にも悪気はなかった。

家族の歴史がこうもややこしいのは、そのせいだ。

もっとも深い影響は、しばしば意図のないところからやって来る。

父親は、いつも言葉で教えるわけではない。

母親は、いつも助言で教えるわけではない。

ただ耐えることで教えるときもある。

黙っていることで教えるときもある。

決して口にしない恐れを通して教えるときもある。

子どものころ、私は観察する者になった。

注意深く耳を澄ませた。

表情を見つめた。

機嫌を読み解いた。

経済や政治や人間関係を理解するよりずっと前に、私は空気を理解していた。

緊張が部屋に入ってくれば、それが分かった。

失望が食卓についていけば、それが分かった。

名づけようのない重荷を誰かが背負っていれば、それが分かった。

家族は地図をつくる。

道の地図ではない。

ふるまいの地図だ。

その地図は、どこでなら話してよく、どこでは黙っているべきかを教える。

どの感情なら受け入れられるかを教える。

どの感情が危険か。

どの感情は隠さねばならないか。

何年ものあいだ、私はその地図に従った。

納得していたからではない。

持っている地図がそれしかなかったからだ。

受け継ぐものが物であることはめったにないのだと分かったのは、ずっとあとのことだ。

もっとも強力な遺産は、隠れてやって来る。

恐れ。

習慣。

役割。

沈黙。

そしてある日、運がよければ、私たちはその遺産を見つめ、単純な問いをひとつ立てる。

これを、次へ渡さなければならないのか。

その問いが、自由の始まりだった。

フェルディナンド